

## 奉職四〇年の感謝と思い出

南 啓治



私が本学に奉職したのは、一九七四（昭和四九）年四月であった。その前年、文学部の中に新たに教育学科が設立スタートし、その中、私が担当する授業科目が二年生で開講することになっていたため、スタートから二年目のこの年から晴れて「文学部教育学科専任講師」として本学に奉職、教壇に立つことになったのである。本学に教育学科が設置されるといふ情報とともに、「この教育学科で、若手で社会科学教育を担当出来る教員を探している。については南君応募してみないか」と恩師に紹介され、二つ返事でこの有難い就職の話をお受けしたが、本

学と私との最初の出会いであった。以来、四〇年、今振り返ると、記憶が凝縮されているためか、あつという間の四〇年であった、と感じられる反面、その記憶を一つ一つ緋けば、そこには数多くの様々な場面を伴った懐かしい思い出が次から次へと顕現して来る。そして、それらの思い出を一つ一つ振り返ると、誠に感慨深い気持ちに誘われる。今回は、それらの数ある思い出の中から、今も私の中で最も強く記憶に残る、一、史学科設立時の思い出 二、ダーラム分校出張時の思い出 三、文学研究科 日本史・文化財学専攻設置時（最近のことであるが）の思い出、この三点について紙幅の許す限り、記してみることとする。なお、この間、一、については、同誌に「史学科二〇年の歩み」（二〇〇五年二月・第二〇号）、「史学科教育の二十五年」（二〇一〇年二月・第二五号）に記し、二、については「史学科教育二十五年」および「歴史都市ダーラム―ダーラム大学とオリエンタル・ミュージアム」（一九九一年二月・第六号）にも記しているので、多少重複するところもあるが、併読して頂ければ幸いである。

## 一、史学科設立時の思い出

それは忘れもしない一九八三（昭和五八）年四月早々の私の誕生日のことであった。いつもの通り大学へ出校すると、急に秀野通泰事務長から呼び出しがあり、何事かと事務長席に伺うと、そこにはすでに西洋史（ドイツ史）の小林幸輔教授、東洋史（中国史）の河上光一教授も来ていて、私がそこに加わると、事務長から「今回新たに文学部の中に史学科を設置したいので、ご協力をお願いしたい。ついては、大変お忙しいところ恐縮ながら、早速、本日から史学科のカリキュラムを作成して頂きたい」と、伝達された。この時点で、これまで何も知らされてい

なかつた私は、あまりの突然のことで正直驚かされたが、あとで聞いてみると、当日この席には姿がなかつたが、日本史（法制史）の北條浩教授が中心となつて総長（のち学主）沖永莊一先生と史学科設置に向けての計画を起ち上げていたことが分かつた。当時、本学の規模が大きくなっていくのにつれて、本学にも歴史を専門とする教員が、少しずつ集まつて来ており、それらの教員は当時、各学部各学科に分散して配属されていたが、これらの教員を糾合すれば、史学科を設置することは可能であつたのである。そして、この日から北条・小林・河上の各教授と当時教育学科で助教授となつていた私の四人は、授業が終わると会議室に集まつて、連日、文部省（当時）に提出する書類作りに没頭することとなつたが、その際、最も議論に時間を費やしたのが、史学科の学科としてのスタイルについてであつた。近年は歴史関係の学部・学科にもいろいろなスタイルが許され、そのカリキュラムの内容もバラエティに富むものが多くなつたが、当時は国立大学と組織的に規模の大きな学部の場合には別として、私立大学の歴史関係の学科では、おおむね次の二つのスタイルが一般的であつた。すなわち、①専攻で専門分野を分けるスタイルと、②コースで専門分野を分けるスタイルとがそれぞれであるが、これについては私たちの間ではついに結論を出すことが出来ず、最終的には総長沖永先生のご判断を仰ぎ、②のスタイルを採用することに決した。ちなみに、現在の史学科のコースは日本史・東洋史・西洋史・地理学・考古学の五コースとなつているが、発足当初は、日本史・東洋史・西洋史の三コースのみであつた。なお、現在各コースで開講されている特殊講義・演習・史籍講読という授業科目の名称は、いずれも発足当時のまま、今日まで踏襲されている。

さて、私たちが作成した手書き（当時はパソコンはもとより、ワープロもなかつた）の書類は板橋キャンパスの大学本部に運ばれ、そこで和文タイプに打ち直され、正式な書類として文部省に提出された。以後、今度は文

部省と私たちの間で、認可を得るための折衝が開始されたが、当時は認可に際しては文部省も厳しく、どんな細かなことでも、その都度文部省に呼び出され指導を受けなければならなかった。私の場合は、文部省と折衝するメンバーの中で、ただ一人の助教授ということ、他の教授の先生方から比べれば幾分気持ちが悪であったが、それでも文部省に足を運ぶ回数が増えるにつれ、次第に重い気持ちになっていったことを今でも覚えている。しかし、総長沖永先生はじめ、教授の先生方の対応よろしき（私の知らない所で多くのご苦労もされたようである）を得て、見事、史学科の認可を達成出来、翌年の一九八四年四月から史学科がスタート出来たことは、私にとっても大きな喜びであったし、何よりも、私も史学科設立に参画出来たという、自負にも似たこの喜びは、今でも私の忘れ難い良い思い出となっている。

## 二、ダーラム分校出張時の思い出

一九九〇（平成二）年四月から一九九二年三月にかけてのイギリス、ダーラム分校出張時の思い出については、先にも記したように、本誌の第六号（一九九一年二月）・第二十五号（二〇〇一年二月）にも書いているのであるが、ここでもその時の思い出を書かない訳にはいかない。と言うのも、やはり私の在職四〇年の中で、このダーラム分校で過ごした二年間（四〇年の中のたったの二年間であるが）が、いわば結果的に私の人生に彩を与えてくれた貴重な思い出だからである。人間の脳の各機能を掌る部位の中で、最も記憶を持続的に残す部位は、場所の記憶を掌る部位である、と聞いたことがあるが、私の場合も、他の国内の場所の記憶もさることながら、この

外国（イギリス）のダーラムという場所の記憶がいまだに最も鮮明に残っているのである。その理由を私なりに分析してみると、一つには、このダーラムで二年間を過ごした時期が、私の四〇歳代後半という、一般的にもよく言われるように、人生の中で最も働き盛りの時期に当たっていたこと。二つには、結婚以来、いや、生まれて初めての一人暮らし（単身赴任）の生活を体験したこと。三つには、本学にとっては初めてのプロジェクト（海外に自前の分校を作り、現地にも本学の教員・スタッフを置いて、学生が一年間留学しても四年間で卒業出来るシステム）であり、しかも、その先陣を任されていたこと、責任感に燃えていたこと。四つには、これまた、生まれて初めての外国生活で、すべてが初体験でフレッシュ感に溢れていたこと。五つにはダーラムという都市の素晴らしい環境、などが挙げられると思われる。

ところで、このダーラム分校での仕事は、前の「史学科教育二十五年」でも書いたように、決してのんびりとした、楽なものではなく、むしろ、プロジェクトの最初の起ち上げということで、時間的にも、精神的にも大変厳しいものであった。とくに、開校式の準備は多忙を極め、身も心もくたくたに疲れたが、それにもかかわらず、今思い出すのは、現在はユネスコの「世界遺産」となっている、ダーラムカセドラル（ダーラム市に聳え立つ一一世紀に建てられた巨大な教会）での荘厳な開校式や、イギリスの王族の一員であるケント公爵夫人を招待してのティーセレモニーなど、つらい事よりも、楽しい思い出ばかりなのは何故であろうか。そして、この良き思い出は、他の仕事の部分でも同じで、現地では私のみが教務的仕事の経験者ということから、分校での時間割作成や教室の配置、あるいは、分校の年間スケジュール作成などを一手に引き受け、そうした種類のデスク上の仕事以外でも、教員の中では最も若く、しかも単身赴任という身軽さを期待されて、いわゆる学生部委員としての

仕事も任された。初年度ダーラム分校に留学した学生は文学部の国際文化学科・社会学科・それに史学科の学生約一二〇名であったが、若い学生たちは自ら進んで留学を希望しただけあって活気に満ち溢れており、そのためもあって、時として羽目を外し、宿舎で夜中まで酒を飲み、友人同士で喧嘩をし、宿舎のポーター（守衛）の仲裁では収まらず、夜中にもかかわらず、私に仲裁を求めて来たり、まさに一日二四時間体制での学生指導に当たられた。もつとも、それらの学生たちも、ダーラム大学との交歓サッカー試合では相手を見事に打ち負かしたり、ダーラム市主催の合唱コンクールでは、他の多くのエントリーチームを押さえて優勝したり、その良き存在感を内外に示したことも少なくなかった。私はそれらの学生たちの何人かとは今でも交流し、会うと懐かしいダーラム時代を語り合っている。

それは一年目の夏のことであった。日本から集中講義のためにダーラムに来られた、当時国際文化学科の学科長を務められていた松村正義教授が、集中講義終了後、夫人を連れて、ダーラム大学に併設されているオリエンタル・ミュージアムを見学されている時であった。松村教授が突然陳列されている一枚の絵画の前で足を止められた。教授が、その絵画を見ると、それは同ミュージアムではすでに有名となっている、日本の首相吉田茂氏が描いたという絵画であった。この絵画にはその当初から、作者として「プライム・ミニスター、シゲル・ヨシダ」の説明が付いており、私たちもそれまで、この説明に何の疑いも抱かず、それを信じて来たが、松村教授がこの絵画を見て足を止めたのは、「吉田首相には絵画を描く趣味はないはずなのだ」という疑問を持たれたからであった。松村教授は本学に教授として着任する以前は、外務省や国際交流基金などに勤務されてきた外交のエキスパートであり、したがって、政治家に対する知識は豊富に持たれており、吉田首相に関しても私たちに以上に知識を持

たれていたはずである。その松村教授がそうした疑問を持たれたのは、それなりの理由があるはずであったが、しかし、その時はそのままに打ち過ぎ、教授は仕事が終わると帰国されて行った。ところが、その後間もなく、私の所へ松村教授から手紙が届き、それは、「どうしても、あの絵画のことが気になるので、あの絵画が本当に吉田茂首相のものか一度調べてもらえないか」という調査依頼の手紙であった。そこで私は直ちにオリエンタル・ミュージアムへ出向き、学芸員にこの絵画について質問すると、学芸員は、「この絵画が送られてきた時の送り主からの手紙が保存されている」と言うので、早速その手紙を見せてもらおうと、吉田首相と同姓同名のまったく別人が描いた絵画であることが判明した。その手紙には日本語で、「自分の夫が亡くなったので、生前夫が描いた絵画を然るべき美術館や博物館に寄贈している」との内容が認められており、手紙が日本語で書かれていたため、また、絵画の作者が日本の高名な首相と同姓同名であったため、同ミュージアムの方で誤解をしてしまったというのが、どうやら、その真相のようであった。私がこのことを送り主からの手紙をもとに説明すると、それまで自分たちが誤解しているとも知らず、日本の高名な首相の絵画として展覧していた同ミュージアムも驚いたが、このことを手紙に詳しく書いて松村教授へ報告すると、同教授も自身の疑問が的中したとして大いに喜ばれ、その後、同教授によってこれが雑誌『文藝春秋』（一九九一年六月号）のコラム欄にも紹介されたりした。私のコラム赴任時代の思い出の中にはこのような面白い話も詰まっている。

なお、このダーラム分校へは総長沖永先生も時々視察に来られ、日本では到底、先生と直接話が出来る機会など減多にないのであるが、この時は、日英の教員・職員合わせても、そのスタッフが二十人ほどであったということもあり、先生とも親しく会話を交わすことが出来たことも忘れ難い良き思い出である。

### 三、文学研究科 日本史・文化財学専攻設置時の思い出

この思い出については、すこぶる最近のことであり、思い出として記すのにはいささか躊躇する面もあるが、私にとっては、やはり、この四〇年の中では忘れることが出来ない出来事であるので、最近のこととして、周囲に支障が及ばないことを念頭に、次に記してみたい。

二〇一〇（平成二二）年四月、定年退職された学科長菅野則子教授の後を受けて、図らずも私が学科長として史学科の運営を任されることとなったが、その私には一つの課題があり、それは史学科の上に大学院を設置することであった。すでに記したように、史学科の発足は一九八四年であったが、発足以来、歴代の学科長が史学科の上に大学院を設置することを課題としながら、どの学科長もそれを実現せずに終わっていたからである。そこで、私が学科長として仕事を始めたその当初から、このことを経営者である、理事長・学長の冲永佳史先生や副学長の冲永荘八先生に提案する機会を窺っていたのであったが、たまたまある会議の終了後、副学長の冲永先生にこの話を申し上げる機会を得、その場では明確なお答えを頂けなかったが、その後暫くしてから、企画グループから呼び出しを受け、学長・副学長両先生から大学院設置へ向けて動き出ししても良いという伝言を得ることが出来た。その時、すでに私は史学科の上に大学院を設置するとすれば、どのようなスタイルが可能であるか、また、大学院設置如何に関わらず、そろそろ史学科の先生方にもこの課題を考えて頂きたいと思い、史学科専任教員会議の議題にも乗せていたのであったが、晴れて、その許可を頂いて、以後、同会議でも本格的な議論を進めることが可能となったのである。そうした中で、勿論その間様々な紆余曲折はあったのであるが、現在のスタイル――



すなわち、史学科と本学が山梨県笛吹市に設置している「山梨文化財研究所」（現在は、「帝京大学文化財研究所」とがコラボレーションすることによって生まれた「文学研究科 日本史・文化財学専攻」というスタイル）でついに文部科学省の認可を得ることが出来、二〇一二（平成二四）年四月から同専攻（修士・博士課程）を設置することが出来たのは、私にとつては望外の幸せであった。歴史好きの日本国民の需要が高い日本史学はさて置き、近年ユネスコの世界遺産登録などで、また、現今最も必要とされているソフトパワーの重要要素の一つとして注目されている文化財学を、このように本学の大学院の一専攻として設置することが出来たことは、おおいに時宜にかなったことと今でも確信している。それにつけても、ここで改めて、史学科および文化財研究所の先生方のご協力に対して感謝申し上げますと共に、この計画に対して、当初より全面的且絶大なご支援・ご協力を惜しまれなかつた、学長・副学長両先生のお力に対して改めて深甚なる感謝を申し上げます。しかも、今回の認可・設置のための書類作成や文部科学省との折衝では、企画グループ・教務グループなど事務サイドの主體的な協力のもとに推し進められたのであって、そうした事務サイドの先生方にも厚く感謝を申し上げます。加えて、本学の事務サイドの充実した体制と、機動力の高さにも、改めて敬意を表する。

なお、こうして設置・発足した大学院「文学研究科 日本史・文化財学専攻」も今年度はすでに二年目を迎えたが、発足当初から入学志願者も予想していた以上に集まり、また、入学して来た学生諸君も真面目で、本専攻の今後が大いに期待出来るものになっていることも合わせて報告しておきたい。

さて、以上、この三点を中心に私の感謝と思い出を記してきたが、まだまだ私の思い出は尽きない。例えば、私は二〇〇七（平成一九）年四月から二〇一〇（平成二二）年三月までの三年間、本学メディアライブラリーセンター（略称メ

リック)の副館長を務めたが、ここで得た多くの有益な体験は、他では得ることが出来ない豊かな知的財産となつて、今でも私の活力を潤している。それというのも、私は幼い時から本が好きで、これまでもいろいろな土地で図書館を利用してきたが、しかし、それはいつも外からの利用に止まり、図書館の内部までは足を踏み込むものではなかった。それが副館長になることによつて、ここで初めて内からも日々の図書館活動の実際に触れることが出来、それを通して地味な仕事ではあるが、改めて図書館活動の意義深さと重要性を再認識させられたからである。また、本が好きでも、本全体については多々知らないことも多く、それらを専門性の高い、本学のライブラリアンたちから身近に学ぶことが出来たことも貴重な体験であつた。その意味では大変魅力的で居心地の良い三年間であつて、この思い出も忘れられない良き思い出である。ここで改めてメリックの親切で有能なライブラリアンたちにも感謝を申し上げたい。

なお、最後となつたが、私が在職した四〇年間で振り返れば、本学にあつては、いつも新しい校舎・施設の建設へ向けての高らかな槌音が絶えず鳴り響いていた四〇年でもあつた。それほどにこの四〇年間は本学にとつても一途に発展してきた四〇年であつて、この発展の勢いは現在も止まるところを知らない。すでに医学部・薬学部のある板橋キャンパスはその広大な校舎・病院などの総合整備を終え、また、私が勤務する八王子キャンパスでは、本学のホームページでも紹介され始めたように、二〇一七(平成二九)年全体完成へ向けて、これまでにない高層タワーを併設した巨大校舎の建設が始まつており、それはまさに本学の力強い発展のシンボルとも言えるものである。振り返れば、私はこのように絶えず発展する槌音高い本学に教員として在籍し、四〇年間という長い間生活してきたのであつて、それは私にとつてもこの上ない幸せの年月であつたと今つくづく思う。そうした意味からも本学が今後も益々発展することを衷心から祈念して、私のこの稿の終わりとしたい。(二〇一三・一一・一〇記)